

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|---|------------------------------------|
| Ⅰ | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| Ⅱ | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| Ⅲ | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| Ⅳ | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| Ⅴ | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【宮城県・仙台市】

学校名【 仙台大学附属明成高等学校 】

1 実践テーマ	I
2 実施対象者 (学年・人数)	仙台大学附属明成高等学校 スポーツ創志科 (第1学年・121人(男子86人、女子35人))
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名(スポーツ概論、スポーツⅡ「球技」、スポーツⅢ「柔道」) ② 行事名(「ゴールボール体験授業」「高大連携授業「柔道」) ③ その他() (2) 地域における活動 ① イベント名() ② その他()
4 目標 (ねらい)	東京オリンピック・パラリンピックの開催年に学科が再編されスポーツ創志科が創設されたことを機会に、広くスポーツの価値を学ぶ私たちとして、日頃接点の少ないパラリンピックを学び障害者スポーツへの理解を深める。また、高大連携授業「柔道」を通してその歴史とオリンピックとの関わり、ルールや指導法を理解し、理論と実技の探究を図る。
5 取組内容	8月18日～20日 男女 「基礎から学ぶスポーツ概論」を使用しオリンピック・パラリンピックの事前学習及び確認テスト(資料1) 8月27日 男子 パラリンピックについての講義及びゴールボール体験 (パワーポイント写真(資料2)及び生徒メモ、感想(資料3)) 9月1日、8日、15日 高大連携授業「柔道」 (パワポ写真(資料2)及び講義内容(資料4)スマホ課題回答(資料5))

	<p>1月25日 女子 ゴールボール体験事前研修～実物のモデルがいるアニメでイメージ学習～ (資料6)</p> <p>1月27日 女子 パラリンピックについての講義及びゴールボール体験 (パワーポイント写真(資料2)、要項(資料7))</p> <p>1月27日 男子 1月26日～28日に高大連携授業「柔道」を仙台大学で講義・実技を行う予定であった(資料8)が、新型コロナウイルス第3波の影響で直前になり、仙台大明成高校で行い、講義はリモート形式で行うことになった。(パワーポイント写真(資料2))評価については、実技テストと、講義の確認テスト(資料9)を行った。</p>
<p>6 主な成果</p>	<p>1 はじめに 実践研究のテーマ名はオリンピック・パラリンピックを「知る」「みる」「体験する」であった。新型コロナウイルスパンデミックの影響で具体的な取組の内容や時期を多少変更せざるをえなかったが講師の先生方のお陰で生徒たちはアスリート魂の知的・身体的好奇心を揺さぶられ、本校が今年度創設した「スポーツ創志科」という体育科の1回生の自覚を育むことができた。</p> <p>2 「ゴールボール体験」 体育科生徒としては、自分の専門種目のスポーツに専念するだけではなく、広くスポーツの価値を学ぶことを目的に、オリンピックの起源や歴史、パラリンピックについても知ることに一環として、本事業ではまず「ゴールボール体験」を企画した。</p> <p>① 衝撃の「リオデジャネイロ・パラリンピックのプロモーション動画」 宮城県障害者スポーツ協会に講師をお願いしたところ快く引き受けてくださり、計画を立てていく中でさらに講演会もお願いしたところこちらも快諾していただいた。 当日の「スポーツとセカンドキャリア」ーパラリンピックを通じて多様な価値観を学ぼうーの講演では、事前学習では得られなかった感動の「リオデジャネイロ・パラリンピックのプロモーション動画」も見せてくださった。多くの生徒の感想が、障害を持っている人に対するイメージを変えた。「障害者は可哀想だ。」「人生が面白くなさそう」と思っていたこととは違い、「あんなに楽しそうに人前で演奏やダンス、スポーツをしていることに驚いた。」そして、パラリンピックは障害のある人にもスポーツをしてもらうことだけではなく共生社会で健常者と障害者が一つになることだと生徒たちが感じたことが大きな成果だった。(パワーポイント写真(資料2)及び写真(資料2-2)、感想(資料3))</p>

② 見るのとするのでは大違いな「ゴールボール」

「ゴールボール体験」では、生徒たちの感想は「とても難しく怖いことを知った。あたりが真っ暗で怖い。ボールがどこにあるのか不安。ボールが顔に近づいてくると益々怖い」というものだった。それでも生徒たちは床のラインの凸を感じ取り、ボールの鈴音で位置を探り、チームメイトの声とともにゲームを進め上達した。彼らはこの体験によって講演で知った“失われたものを数えるな 残っているものを最大限に活かせ”という言葉思い出していた。

生徒たちは「ゴールボール体験」から周りで見えて想像する当人の困り感と自分が体験した視覚障害の困り感の大きな違いを知り、「障害者の気持ちがかかって良かった。帰り道や駅などで障害者をサポートするなど、周りを見て行動したい。」という善意を行動に移す心を育めたことが大きな成果だった。(パワーポイント写真(資料2)、感想(資料3))
後日、授業の中で実技を行い、上記の成果による取り組みの良さが確認された。

3 高大連携授業「柔道」

今年度から仙台大学附属高校となった本校は、7年一貫教育を行い、大学と連携した授業を推進することになった。実技では「柔道」を取り入れた。授業は仙台大学の柔道場に3日間通い行った。

① 講義「柔道」

リオデジャネイロオリンピック柔道女子団体監督を務めた仙台大学現代武道学科の南條充寿教授及び日本オリンピック委員会強化スタッフで同大学現代武道学科の川戸湧也助教授が教えてくださる「柔道の歴史」「柔道のルール」「試合の変化」「指導上の留意点」にはさすがに深みがあり生徒たちを釘付けにした。

その中で奇しくも、日本傳講道館柔道を創始した嘉納治五郎が日本最初のオリンピック・ムーブメントリーダーとなり、ストックホルムで行われた第5回オリンピックに日本が初めて参加したことを生徒たちは知った。(パワーポイント写真(資料2))

生徒たちがオリンピックの理念と「柔道」の人間形成を目的とする「精力善用」「自他共栄」の考え方は共通することを理解したことは大きな成果である。また、「指導上の留意点」はスポーツの指導者を目指す生徒たちにおいて他競技にも通じる大きな財産となった。(課題と感想(資料4))

② 実技「柔道」

「柔道」が人間形成を目的とするものであることを知った生徒たちは素直に一所懸命授業に取り組んだ。規律や段階的練習方法、技のポイント、猛暑の中の安全対策等を楽しく有意義に学んだ。(パワーポイント写真(資料2)、課題と感想(資料4))

自分の専門外の競技を深く知ることは喜びでもあり、アスリートとして身体支配能力の向上に繋がるところでもある。指導者になるための資質向上にも繋がった。

	<p>③ スマートフォンを使った振り返り学習 仙台大学には学校バスで3日間通った。認知（理解度）と情意（態度）の評価として帰りの時間を無駄にしないようバスの中で課題を与えられた。（資料4） 回答期限は授業の当日中アンケート形式と記述形式の課題である。生徒たちの回答抜粋は最終日のものである。ここには様々な自分の目標や気づき、思いが書かれている。（資料4）この習慣が予測しがたい未来を力強く生きていくツールとして育めたことが成果であった。</p> <p>3 1月の授業 新型コロナウイルスや大学の施設利用の関係で上記2つの男女入れ替え事業は1月となった。</p> <p>① 「ゴールボール体験」 講演会、実技体験とも同様の成果が現れた。男子の86人に対し女子は34人であった。事前学習として実物のモデルがいるアニメを見て当日を迎えることができた。（資料6）また、少人数であったため、視覚障害者の困り感体験の時間を多くとることができた。障害者に寄り添う気持ちを増やすことができた。（パワーポイント写真（資料2））</p> <p>② 高大連携授業「柔道」 正に新型コロナウイルス第3派の影響で、実施直前になり大学での実施はできなくなった。（資料8） 座学はリモートで行った。（パワーポイント写真（資料2））確認テストは本校職員が制作した。（資料7） リモートによる授業は生徒にとって臨場感に欠ける面はあるが、双方向の応答ができる面では移動による時間的ロスを防ぐ利点があった。また、職員にとってはリモート機器操作の研修になった。 実技は本校職員が生徒86人を4～5人で指導した。職員が皆で計画を練って行い受身の指導を行った。指導力の向上を図ることができた。</p>
<p>7実践において工夫した点（事業の特色）</p>	<p>1 「ゴールボール体験授業」</p> <p>① 講演をしている間に実技のコート作成を行った。コートはラインテープの下に直径3mmのロープ張り、選手が自分の位置を確認できるようにした。</p> <p>② アイマスクは実習費から支出し、100均で揃え各自の所持品とした。</p> <p>③ ボールを5個購入したので、授業でも実施することができた。ボールは正式ではないが、安価で軽いので恐怖心はなくなる利点はある。</p> <p>④ コロナ対応：マスク着用、手指及び靴底アルコール消毒等。</p> <p>2 高大連携授業「柔道」</p> <p>① 夏の暑さ対応：水分補給、健康管理センター利用、講義・実技の時間配分、大学施設借用、事前打ち合わせ等。</p> <p>② 移動時間ロスについて（片道1時間超）：スマートフォンでの振り返り。</p>

	<p>③ 柔道着：学校で購入し、実技期間生徒に貸し出す。</p> <p>④ 評価：実技指導と実技採点は大学で行う。生徒掌握、理解度、態度については高校で行う。</p> <p>⑤ コロナ対応：柔道は組み合わせることが多いのでマスクは授業を通して着用、手指消毒、畳は大学で消毒、バス乗車時にも手指消毒、大学入構時検温・2週間分の検温記録提出。</p>
8主な課題等	<p>1 「ゴールボール体験授業」</p> <p>① 是非、実技だけではなく講演も一緒に（時期をずらしても）行った方が障害者と健常者の共生社会について生徒は実感すると考える。 本校では2時間講演、2時間実技の順で実施した。</p> <p>② 宮城県障害者スポーツ協会の方々はとても親切です。</p> <p>2 高大連携授業</p> <p>○ リモートの授業は事前練習が必要。 「スポーツ概論」の授業でも大学のアスレティック・トレーナーと行いましたが本校の機器の不具合がありました。 「柔道」では相手方の先生がホワイトボードに板書する際、ピンマイクの音量が上下することがあった。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>1 「ゴールボール体験授業」 学校の予算内で、同様の事業ができないか検討中である。 ボールは購入したので、体験授業を取り入れて行く方向である。 障害者及び障害者スポーツについて見地を得たので「スポーツ概論」等の授業の中に取り入れて行く。</p> <p>2 高大連携授業「柔道」 次年度も取り入れて行く方向である。スポーツ創志科は「柔道」を通した人間形成の精神を2年間醸成していく。</p>